

# 高校生のコミュニティとの 関わり合いに関する調査

- 2013-14年調査報告 -

岡本智周・坂口真康 編

筑波大学共生教育社会学研究室

# 高校生のコミュニティとの 関わり合いに関する調査

2013-14年調査報告

---

## 目 次

はじめに .....	5
調査のねらいと概要 .....	7
第1章	
現代高校生における共生社会意識の諸特徴	岡本智周 ..... 11
第2章	
高校生が想起する「『共生社会』に関する問題」	飯田浩之 ..... 25
第3章	
高校生における「共生志向」・「地元志向」の特徴と その関連要因に関する検討	新井 雅 ..... 39
第4章	
高校生の地元志向性とその意識	津多成輔 ..... 65
第5章	
高校生の地元志向の分析と関連する社会意識の検討	小山田建太 ..... 79
第6章	
友だちとの関わり方から見る 現代高校生のコミュニティへの意識	江角周子 ..... 93

---

---

第7章		
将来の暮らしにおける地元や家族との関係の持ち方と 共生意識の関連の検討	大林沙希	109
第8章		
高校生のコミュニティに対する愛着の構造	龍 伸剛	119
第9章		
高校生における外国や外国人に関する意識の考察 ——ナショナルな枠組みの柔軟性に焦点をあてて	坂口真康	127
第10章		
障害者への支援を行う者の特徴の検討	原市紘奈	139
第11章		
高校生のメディアに対する信用と 日本社会についての認識との関係の検討	長創一朗・川口理帆	143
第12章		
〈日本的〉な文化事象と高校生——コミュニティと ポップカルチャー・メディアとの関連を中心に	桜井淳平	151
「高校生のコミュニティとの関わり合いに関する調査」単純集計結果		171

---

# 第1章 現代高校生における共生社会意識の諸特徴

岡本智周

## 1. 分析の焦点

この章では、社会における人間の「共生」に対する高校生の意識を取り上げたい。成人の共生社会意識と高校生の意識との対比、および、高校生における地元志向性と共生社会意識との関連に、分析の焦点を定める。

日本社会に生きる人びとの共生社会意識については複数の先行調査が存在している。まず、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）のもとにおかれた「共生社会形成促進のための政策研究会」が2004年に行った「共生社会に関する基礎調査」が挙げられる（共生社会形成促進のための政策研究会 2005）。この調査では、全国の20歳以上の者を母集団として5000人を抽出し、調査員による個別面接聴取により3470人からの回答が得られた。

次に、「共生」に向かう社会意識の背景の探索を行ったものとして、早稲田大学のプロジェクト研究所であるリスク共有型共生社会研究所が2010年に行った「共生社会に関する調査」がある（リスク共有型共生社会研究所 2012）。この調査はウェブ調査であり、インターネット調査専門会社に登録している20歳以上のモニタより、性別・年齢層（20代/30代/40代/50代/60代以上）・居住地域（北海道/東北/関東/中部/近畿/中国/四国/九州）ごとに日本の総人口に比例した人口構成比で計2000人を抽出し、回答が得られた（以下、本章の表中では「2010年版」と表記する）。

さらに、早稲田大学のリスク共有型共生社会研究所の調査デザインに則る形で経年変化をみるために行われたのが、筑波大学人間系研究戦略委員会による2014年の「共生社会に関する調査」である（岡本・坂口編 2014）。この調査でも2000人の対象者から回答を得ている（以下、本章の表中では「2014年版」と表記する）。

「高校生のコミュニティとの関わり合いに関する調査」<sup>1)</sup>（以下、「高校調査」とする）では、これらの先行調査で問われた内容と比較可能な問いを設定しており、高校生の意識が帯びている特徴を成人の意識の様態に比して分析することが出来る。本章の第1節・第2節ではその作業の結果を提示し、第3節において、高校生の共生社会意識が「地元」の捉え方といかなる関連を有するのかを示すこととしたい。

## 2. 成人の共生社会意識との比較

### (1) 人と人とのあいだの「違い」

先行する諸調査では、人びとの共生社会意識を検討するに当たり、「共生」を必要とするそもそもの社会状況についての認識を尋ねる問いが設定されている。身の回りにある人と人とのあいだの「違い」についての気づきを回答者に表現してもらうものである。高校調

査でも Q13 において「以下には、人と人との間の様々な「違い」が挙げられています。あなたのお住まいの地域で、問題を引き起こすことがあるとすれば次のうちのどのような「違い」だと思いますか。この中からあてはまるものをいくつでも選んで○を付けてください」という問いを設定した。その結果が表 1 である<sup>2)</sup>。

表 1 問題を引き起こし得る「違い」(Q13)

(%)	2010 年版	2014 年版	高校調査
1. 居住年数の違い	17.1	14.2	10.5
2. 世代の違い	59.5	58.6	32.8
3. 性別の違い	10.0	9.9	4.0
4. 心身障害の有無	13.8	10.7	12.3
5. 出身地域の違い	9.3	9.6	5.0
6. 学歴・出身学校の違い	7.1	6.5	13.9
7. 貧富の差	39.3	32.4	14.3
8. 職業の違い	15.2	12.3	8.1
9. 社会的地位の違い	18.8	16.6	11.2
10. 支持政党の違い	5.8	5.0	4.2
11. 宗教的信条の違い	21.5	16.3	10.0
12. 人種・国籍の違い	17.3	12.8	7.5
13. その他	2.2	7.0	2.4
14. どの違いも問題を引き起こさない			35.0
無回答			6.6
N	2000	2000	1633

(2010 年版質問文) あなたのお住まいの地域で、次のような「違い」が問題を引き起こすとすれば何だと思えますか。この中からあてはまるものをいくつでも選んでお答えください。

(2014 年版質問文) あなたのお住まいの地域で、もし何かの「違い」が問題を引き起こすとすれば、その原因になる「違い」は何だと思えますか。この中からあてはまるものをいくつでも選んでお答えください。

先行調査とは質問文の表現が若干異なっているが、回答の分布の概況を比較することはできよう。2010 年版・2014 年版の成人調査では「世代の違い」が挙げられる割合が大きいことが特徴であった。高校生からの回答においてもその割合の大きさが指摘できるが、「居住年数」「心身障害の有無」「学歴・出身学校の違い」「貧富の差」「社会的地位の違い」「宗教的信条の違い」まで、広く挙げられている点が興味深い。

とくに、「学歴・出身学校の違い」が挙げられる割合が成人の回答よりも大きくなる点、反対に「職業の違い」「人種・国籍の違い」の割合は成人よりも小さくなる点からは、高校生特有の社会認識の特徴が理解できる。高校調査においては選択肢に「どの違いも問題を引き起こさない」を加えたところ、35%の回答者がこれを選択した点にも注目できる。

## (2) 障害者・高齢者・外国人への対し方

「共生」のための態度を尋ねたのが、Q14 の「あなたは、街で困っている「障害のある

人」「お年寄り」「外国人」に出会ったときに、どのように感じますか？ あてはまる項目のすべてに○を付けてください」という問いである。表2にその結果を示す。

表2 街で困っている他者への態度 (Q14)

(N=1633、%)	積極的に手助けしたい	接し方がわからない	お節介になる気がする	専門の人に任せた方がよい	自分にとって負担になる気がする	この中であてはまるものはない	無回答
1. 障害のある人	25.2	47.7	14.1	14.0	4.2	6.5	0.8
2. お年寄り	47.9	18.6	24.2	3.9	4.2	7.3	1.0
3. 外国人	38.0	43.4	7.2	4.4	3.2	8.7	0.9

高校生がより積極的な関わりの態度を示すのはお年寄りに対してである。その理由は、「接し方がわからない」の割合が小さいことから読み取ることができる。

対して、「接し方がわからない」とする回答の比率が高くなるのが障害者と外国人に対する態度であり、高校生の率直な実感が表明されていると言える。この点について、成人からの回答では異なる傾向が示されていた。以下の表3が成人調査の結果である。

表3 街で困っている他者への態度 (成人調査)

(N=2000、%)		積極的に手助けしたい	自分が何をすればよいかわからない	どのように接したらよいかわからない	お節介になるような気がする	専門の人や関係者にまかせた方がよい	自分にとって負担になるような気がする	この中であてはまるものはない
1. 障害者	2010年版	33.0	27.7	30.5	17.5	13.9	5.4	7.0
	2014年版	32.8	28.1	30.0	16.2	15.0	7.4	8.6
2. 高齢者	2010年版	45.4	18.4	15.3	21.8	8.1	6.3	7.7
	2014年版	42.7	18.7	15.8	19.8	9.0	7.3	10.4
3. 外国人	2010年版	25.5	24.2	38.7	7.6	5.7	6.8	10.1
	2014年版	24.7	25.2	37.3	7.6	6.8	6.6	12.4

(2010年版・2014年版) あなたは、街で困っている「障害者」「高齢者」「外国人」に出会ったときに、どのように感じますか？ あなたの考えにあてはまる項目のすべてにそれぞれチェックを入れてください。

成人になると障害者と外国人に対しても「どのように接したらよいかわからない」とする割合は減る。その分、高校生よりも「積極的に手助けしたい」の割合が増えていることになる。比較的身近な存在である高齢者との関わりは高校生においても想定可能だが、障害者や外国人との関わり合いは人間の成長と共に拓けてくるものであることがわかる。

### (3) 沖縄の文化の捉え方

国や社会のなかでの文化的差異に対する感度を尋ねるために、Q19では「あなたは、沖縄の文化と日本の文化との「違い」について、どのように考えていますか。あなたの考えに最も近いものを次のうちから1つ選んで○を付けてください」という問いを設定した。

その結果を 2010 年版・2014 年版の結果とともに示したのが表 4 である。

表 4 沖縄の文化と日本の文化との「違い」について (Q19)

(%) (括弧内は 2010・2014 年版での文言)	2010 年版	2014 年版	高校調査
1. 沖縄にはもともと特有の文化があり、現在も日本の文化との違いがある (と思う)	51.3	48.1	51.5
2. 沖縄にはもともと特有の文化があったが、次第に日本の文化との違いはなくなってきている (と思う)	41.5	42.2	44.0
3. 沖縄と日本の文化にはもともと違いはなく、現在も違いはない (と思う)	5.6	6.8	3.0
4. 沖縄と日本の文化にはもともと違いはなかったが、次第に違いが生じてきている (と思う)	1.7	3.1	0.0
無回答			1.5
<i>N</i>	2000	2000	1633

全体的には高校生においても成人と同様の回答分布を示しており、沖縄の文化の独自性を感じている者の割合が大きい。そのうえで注目できるのは、「もともと違いはなく、現在も違いはない」とする者の割合が成人よりもさらに小さい点、また、「もともと違いはなかったが、次第に違いが生じてきている」とする者が皆無である点である。現在の初等中等教育における社会科系科目での学習内容の性質を反映した結果だと言える。

#### (4) 「共生社会」という言葉の認知

端的に「共生社会」という言葉の認知を尋ねたのが、Q20 の「あなたは、「共生社会」という言葉を聞いたことがありますか。また、その意味について知っていますか。次のうちからあてはまるものを 1 つ選んで○を付けてください」という問いである。これは、2004 年の内閣府調査以来、先行諸調査で採用されてきた質問である。それらの結果を示したのが表 5 である。

表 5 「共生社会」という言葉の認知 (Q20)

「共生社会」という言葉を— (%)	2004 年内閣府調査	2010 年版	2014 年版	高校調査
【A群】聞いたこともあり、その意味も知っている	18.1	11.2	11.0	31.0
【B群】聞いたことはあるが、意味はよくわからない	28.6	46.6	40.8	52.5
【C群】聞いたことがない	53.3	42.3	48.2	15.4
無回答				1.2
<i>N</i>	3470	2000	2000	1633

内閣府調査は面接聴取、2010 年版と 2014 年版はウェブ調査であり、高校調査とは回答

方法が異なる。そのため厳密な比較はできないが、それでも高校生において「共生社会」という言葉が成人よりも相対的によく知られていることが指摘できるだろう。「聞いたことがある」者は8割以上となり、「意味も知っている」とする者が3割以上となっている。この結果も、現在の学校教育のなかで「共生社会」や「共に生きる」という概念が諸教科のなかに採用されていることの反映と見ることができる。現在の高校生は、成人以上に「共生」の概念を身近なものとしている。

なお、この問いに対して「聞いたこともあり、その意味も知っている」とした者をA群、「聞いたことはあるが、意味はよくわからない」とした者をB群、「聞いたことがない」とした者をC群と設定し、次節の分析でこの3群のカテゴリを用いることとする。

### (5) 「共生社会」に関する問題

「共生社会」をどのように想定しているのかを尋ねるために、Q21の「共生社会」に関する問題としてあなたが思いうかべるのはどのようなことでしょうか。次のうちからあてはまるものすべてに○を付けてください。※知らない方も、「共生社会」という言葉から思い浮かべるイメージをお答えください」という問いを設定した。その結果が表6である。

表6 「共生社会」に関する問題として思いうかべること (Q21)

(%) (下段は2010・2014年版での選択肢)	2010年版	2014年版	高校調査
1. 近所の人間関係	39.4	35.0	32.1
2. 若い世代と高齢者の関係	54.4	50.9	50.9
3. 男性と女性の平等	27.4	28.7	53.4
4. 障害者の社会生活	25.4	22.7	51.6
5. 都市と農村の関係 (都市と農山漁村の関係)	8.5	8.3	12.9
6. 社会階層の公平さ			23.1
7. 仕事と家庭生活のバランス	17.8	16.1	7.0
8. 企業と消費者の関係	4.6	5.4	9.3
9. 政治的考え方の違い (政治的信条の相違)	2.2	2.7	13.3
10. 宗教的考え方の違い (宗教的信条の相違)	3.3	3.1	24.4
11. 自然環境と人間の関係	31.9	25.7	36.3
12. 日本にいる外国人の社会生活	6.3	6.1	35.3
13. 日本と世界の国々の関係	7.6	7.2	27.6
14. その他	0.4	1.8	0.9
無回答			4.8
N	2000	2000	1633

(2010年版・2014年版質問文)「共生社会」に関する問題としてあなたが思いうかべるのはどのようなことでしょうか。最もよくあてはまるものをこの中から3つまで選んでお答えください。※ご存知ない方も、「共生社会」という言葉から思い浮かべるイメージをお答えください。



2010年版・2014年版では「3つまで」と選択に制限を設けたのに対し、高校調査では「あてはまるものすべて」を選ぶことを求めた。このためこれらの結果を単純に比較することはできないが、高校生において「仕事や家庭生活のバランス」「企業と消費者の関係」が選ばれる割合が小さかったことには注目できる。「共生」のためのこれらの社会的課題は、やはり実際に労働に携わることによって、関心が拓かれるものだということがわかる。

成人調査の結果においては「若い世代と高齢者の関係」に回答が集まる傾向が見いだされたが、高校生に対して選択数を制限せずに尋ねると、世代の問題と同等に多く「男性と女性の平等」「障害者の社会生活」が挙げられることが興味深い。その他の項目に対しても高校生は広く選択をしており、とりわけ「社会階層の公平さ」「政治的考え方の違い」「宗教的考え方の違い」「日本にいる外国人の社会生活」「日本と世界の国々の関係」の割合が大きいことも、高校生であればこそ日常的に学習している内容や、ふれている情報の性質との関連を、推測することができる。

### 3. 「共生社会」という言葉の認知と社会認識との関連

#### (1) 「共生社会」に関する問題の想定の広がり

Q21で尋ねた「「共生社会」に関する問題として思いうかべること」の結果を、前節で設定した「共生社会」という言葉の認知の3群ごとに示すと、表7のようになる。

表7 「共生社会」に関する問題として思いうかべること（A～C群ごと）

認知「共生社会」	近所の人間関係	若い世代と高齢者の関係	男性と女性の平等	障害者の社会生活	都市と農村の関係	社会階層の公平さ	仕事と家庭生活のバランス	企業と消費者の関係	政治的考え方の違い	宗教的考え方の違い	自然環境と人間関係	日本人の社会生活	日本と世界の国々の関係	その他	回答総数／回答者総数
A群	165	281	289	301	67	131	36	52	80	162	188	180	158	3	2093/497
	33.2%	56.5%	58.1%	60.6%	13.5%	26.4%	7.2%	10.5%	16.1%	32.6%	37.8%	36.2%	31.8%	0.6%	
B群	275	450	479	452	117	200	61	82	112	188	325	332	242	3	3318/832
	33.1%	54.1%	57.6%	54.3%	14.1%	24.0%	7.3%	9.9%	13.5%	22.6%	39.1%	39.9%	29.1%	0.4%	
C群	83	99	103	88	26	46	17	18	25	49	80	64	50	9	757/222
	37.4%	44.6%	46.4%	39.6%	11.7%	20.7%	7.7%	8.1%	11.3%	22.1%	36.0%	28.8%	22.5%	4.1%	

ここでは、「共生社会」という言葉を聞いたことの有無（B群とC群の差）、および、意味も認知の有無（A群とB群の差）に着目できる。項目によってはA～C群ごとの選択の割合に大きな差が見られないものもあるが、とりわけ「若い世代と高齢者の関係」「男性と女性の平等」「障害者の社会生活」「日本と世界の国々の関係」について、C群よりもB群、さらにB群よりもA群の者において、それらを「共生社会」に関する問題だとする割合が

大きくなった。「共生社会」という言葉を知り理解することが、社会で生じ得る問題をより幅広く捉えることと結びついている可能性を、ここから読み取ることができる。

その点を検討するために、Q21で尋ねた「共生社会」に関する問題として思いうかべること」の選択数について、A～C群ごとの平均値の比較を行った。分散分析により群間での平均値の差を検定した結果が表8である。

表8 「共生社会」に関する問題として思いうかべることの数（A～C群ごと）

「共生社会」という言葉の認知	高校調査
A群	4.14 (N=506)
B群	3.87 (N=857)
C群	3.02 (N=251)
分散分析による群間の差の検定	1%水準で有意 (F(2, 1611)=14.594)
多重比較による群間の差の検定	A群とC群との差が1%水準で有意。B群とC群との差が1%水準で有意

この結果から、C群よりはB群において、またB群よりもA群において、「共生社会」に関する問題として思いうかべられることが多いことが検証された。

さらに、この点については先行する成人調査においても同様の傾向が指摘されている。高校調査のQ13で尋ねた「地域で問題を引き起こし得る「違い」」の数の平均値を、A～C群で群間比較したところ、表9の結果が示された。

表9 問題を引き起こし得る「違い」の数（A～C群ごと）

「共生社会」という言葉の認知	2010年版	2014年版	高校調査
A群	2.59 (N=223)	2.31 (N=220)	1.47 (N=506)
B群	2.43 (N=931)	2.33 (N=817)	1.35 (N=857)
C群	2.24 (N=846)	1.89 (N=963)	1.25 (N=251)
分散分析による群間の差の検定	5%水準で有意 (F(2, 1997)=4.354)	1%水準で有意 (F(2, 1997)=17.23)	有意確率=.249 (F(2, 1611)=17.23)
多重比較による群間の差の検定	A群とC群との差が5%水準で有意。B群とC群との差が10%水準で有意	A群とC群との差が1%水準で有意。B群とC群との差が1%水準で有意	差に有意性なし

2010年版の結果からは、「共生社会」という言葉を聞いたことがない状態よりは聞いたことのある状態のほうが、また、さらに意味も知っている状態のほうが、自らを取り巻く社会を認識する視野を広くとっていることが示唆された。2014年版の結果からも、C群における平均値がA群・B群のそれに対して有意に小さいことが示されている。このことから、「共生社会」という言葉を知ることが社会認識のあり方に対して一定程度の関係をも

っていることを指摘できる。高校調査においてはこの Q13 の分析結果は統計学的に有意なものとはならず、A～C群ごとの社会的現実の捉え方が成人のそれほどには明瞭に区別できるものではないことが理解されるが、しかしながら平均の値そのものについては、A～C群のあいだに一つの方向性をもった傾向を見ることができる。

## (2) 沖縄の文化の捉え方

高校調査の Q19 で尋ねた「あなたは、沖縄の文化と日本の文化との「違い」について、どのように考えていますか。あなたの考えに最も近いものを次のうちから1つ選んで○を付けてください」への回答結果を「共生社会」の認知の3群の比較によって検討すると、社会事象の捉え方の相違をやはり追認できる。まず2014年版の成人調査における「共生社会」の認知と「沖縄の文化」についての認識のクロス集計結果は表10のように示される。

表10 沖縄の文化と日本の文化との「違い」について (2014年版成人調査)

「共生社会」という言葉の認知		沖縄にはもともと特有の文化があり、現在も日本の文化との違いがあると思う	沖縄にはもともと特有の文化があったが、次第に日本の文化との違いはなくなってきたと思う	沖縄と日本の文化にはもともと違いはなく、現在も違いはないと思う	沖縄と日本の文化にはもともと違いはなかったが、次第に違いが生じてきていると思う	合計
A群	度数	112	95	11	2	220
	%	50.9%	43.2%	5.0%	0.9%	
	期待度数	105.7	92.7	14.9	6.7	220.0
	残差	6.3	2.3	-3.9	-4.7	
B群	度数	388	363	51	15	817
	%	47.5%	44.4%	6.2%	1.8%	
	期待度数	392.6	344.4	55.1	24.9	817.0
	残差	-4.6	18.6	-4.1	-9.9	
C群	度数	461	385	73	44	963
	%	47.9%	40.0%	7.6%	4.6%	
	期待度数	462.7	405.9	65.0	29.4	963.0
	残差	-1.7	-20.9	8.0	14.6	
合計	度数	961	843	135	61	2000
	%	48.1%	42.2%	6.8%	3.1%	
	期待度数	961.0	843.0	135.0	61.0	2000.0

$$\chi^2=19.408, p<.01$$

残差の状態と併せて確認できることは、A群では沖縄文化の歴史的な独自性を認識する回答の比率が有意に高くなるのに対し、B群・C群ではそれが低くなることである。逆にC群では、文化の違いを認識しない回答の比率が有意に高くなる。

これと同様に高校調査の Q19 の結果を示したのが表11である。

表 11 沖縄の文化と日本の文化との「違い」について（高校調査）

「共生社会」という言葉の認知		沖縄にはもともと特有の文化があり、現在も日本の文化との違いがある	沖縄にはもともと特有の文化があったが、次第に日本の文化との違いはなくなってきた	沖縄と日本の文化にはもともと違いはなく、現在も違いはない	合計
A群	度数	272	218	12	502
	%	54.2%	43.4%	2.4%	
	期待度数	262.0	224.6	15.4	502.0
	残差	10.0	-6.6	-3.4	
B群	度数	426	400	24	850
	%	50.1%	47.1%	2.8%	
	期待度数	443.6	380.4	26.0	850.0
	残差	-17.6	19.6	-2.0	
C群	度数	137	98	13	248
	%	55.2%	39.5%	5.2%	
	期待度数	129.4	111.0	7.6	248.0
	残差	7.6	-13.0	5.4	
合計	度数	835	716	49	1600
	%	52.2%	44.8%	3.1%	
	期待度数	835.0	716.0	49.0	1600.0

$\chi^2=8.997, p=.061$

残差の状態に着目すると、成人調査の結果と同じようにA群において「違い」に対するセンシティブリティが示されていることがわかる。B群においては「違いがなくなってきた」という回答の残差が大きくなり、またC群において「違いはない」という回答のそれが大きくなる。「共生社会」という言葉を認知することが社会的な事象を多様なものとして把握することと関係しているという傾向は、この回答結果からも指摘できよう。

ただし高校調査においては、C群において「違い」に対するセンシティブリティが強く示されている点にも留意する必要がある。この点については、次節で検討する高校生の「地元」なるものの捉えられ方から、その理由となる一つの傾向を理解することとなる。

#### 4. 「地元志向」と共生社会意識との関連

##### (1) 進路先

本調査のいま一つの課題は、高校生の「地元」に対する愛着のあり様を把握し分析することにある。近年の若者論でまことしやかに語られる「若者の地元志向性」を検証しその実際を提示することに目的が置かれている。そのため、高校生が自らの進路や将来的な生活の場をどのように想定しているのかを尋ねた。そこで示される地元志向性と共生社会意識との関連を、この章の最後に検討しておきたい。

本調査のQ9では「あなたは、高校卒業後に進学あるいは就職する際、進路先の所在地を

考慮しますか」を尋ね、「考慮する」とした回答者にさらに「どちらの進路先を希望しますか」と尋ねた。それらの結果から、進路先を想定する際の地元志向性について、表 12 にある甲・乙・丙の 3 群が設定された。

表 12 進路先を想定する際の地元志向 (Q9 & Q9SQ1)

	度数	%
【甲群】現在住んでいる地域やその周辺にある進路先	527	33.7
【乙群】現在住んでいる地域から離れたところにある進路先	407	26.0
【丙群】進路先の所在地は考慮しない	629	40.2
合計	1563	100.0
無回答	70	
<i>N</i>	1633	

そしてこれら 3 群ごとに、Q10 の「あなたは将来的に、地元で暮らしたいと思えますか」への回答の分布を示すと、以下の表 13 が得られた。

表 13 あなたは将来的に、地元で暮らしたいと思えますか (Q10)

		とても思う	まあ思う	あまり思わない	まったく思わない	合計
甲群	度数	93	258	139	21	511
	%	18.2%	50.5%	27.2%	4.1%	
	期待度数	49.8	202.1	210.4	48.8	511.0
	残差	43.2	55.9	-71.4	-27.8	
乙群	度数	18	102	207	67	394
	%	4.6%	25.9%	52.5%	17.0%	
	期待度数	38.4	155.8	162.2	37.6	394.0
	残差	-20.4	-53.8	44.8	29.4	
丙群	度数	38	245	284	58	625
	%	6.1%	39.2%	45.4%	9.3%	
	期待度数	60.9	247.1	257.4	59.6	625.0
	残差	-22.9	-2.1	26.6	-1.6	
合計	度数	149	605	630	146	1530
	%	9.7%	39.5%	41.2%	9.5%	
	期待度数	149.0	605.0	630.0	146.0	1530.0

$$\chi^2=169.241, p=.000$$

残差の状態に着目すると、高校卒業後の進路先を「現在住んでいる地域やその周辺」と想定している甲群では将来的にも地元で暮らしたいと思う者が多く、進路先を「現在住んでいる地域から離れたところ」に想定する乙群では将来的に地元で暮らしたいと思わない

者が多くなることが理解できる。進路先の想定は、将来的に向けた地元志向性とも関連していると言える。また、進路先をとくに考慮しない丙群においても、将来的な地元志向性が弱いことが指摘できる。

## (2) 「共生社会」に関する問題

これら甲～丙の群ごとに Q21 の「共生社会」に関する問題として思いうかべること」の回答の分布を検討すると、表 14 が得られる。

表 14 「共生社会」に関する問題として思いうかべること（甲～丙群ごと）

地元志向 (進路先)	近所の人間関係	若い世代と高齢者の関係	男性と女性の平等	障害者の社会生活	都市と農村の関係	社会階層の公平さ	仕事と家庭生活のバランス	企業と消費者の関係	政治的考え方の違い	宗教的考え方の違い	自然環境と人間関係	日本人の社会生活	日本と世界の関係	その他	回答総数／回答者総数
甲群	165	270	283	283	50	129	29	32	49	108	195	175	141	5	1914/503
	32.8%	53.7%	56.3%	56.3%	9.9%	25.6%	5.8%	6.4%	9.7%	21.5%	38.8%	34.8%	28.0%	1.0%	
乙群	131	216	226	210	62	102	33	50	65	110	150	152	129	7	1643/392
	33.4%	55.1%	57.7%	53.6%	15.8%	26.0%	8.4%	12.8%	16.6%	28.1%	38.3%	38.8%	32.9%	1.8%	
丙群	208	314	331	318	88	132	50	66	95	164	225	226	163	3	2383/592
	35.1%	53.0%	55.9%	54.5%	14.9%	22.3%	8.4%	11.1%	16.0%	27.7%	38.0%	38.2%	27.5%	0.5%	

3群ともに同様の分布を示す項目が多いが、「都市と農村の関係」「企業と消費者の関係」「政治的な考え方の違い」に着目すると、甲群に比べて乙群・丙群のほうがそれらを想起する割合が大きいことがわかる。甲群の者に比して乙群・丙群の者に、社会で生じ得る問題をより幅広く捉える可能性があることを指摘することができる。

その点を検討するために、Q21 で尋ねた「共生社会」に関する問題として思いうかべること」の選択数について、分散分析により甲～丙群ごとの平均値の群間比較を行うと、次ページの表 15 の結果が得られた。10%水準での有意傾向ということになるが、乙群のほうが甲群よりも「共生社会」に関する問題として思いうかべることが多いことが検証された。

さらに Q13 で尋ねた「地域で問題を引き起こし得る「違い」」の数の平均値を、甲～丙群で群間比較すると、次ページの表 16 の結果が示された。ここからも、やはり 10%水準の有意傾向ではあるが、3群の平均値のあいだに相違があることが検証された。また、乙群のほうが丙群よりも自らを取り巻く社会を認識する視野を広くとっていることも示唆された。このことから、地元志向の強弱が社会認識のあり方に対して一定程度関係をもっていることを指摘できる。

表 15 「共生社会」に関する問題として  
思いうかべることの数（甲～丙群ごと）

地元志向（進路先）	高校調査
甲群	3.63 (N=527)
乙群	4.04 (N=407)
丙群	3.79 (N=629)
分散分析による群間の差の検定	10%水準で有意 (F(2, 1560)=2.489)
多重比較による群間の差の検定	甲群と乙群との差が10%水準で有意

表 16 問題を引き起こし得る「違い」の数  
（甲～丙群ごと）

地元志向（進路先）	高校調査
甲群	1.42 (N=527)
乙群	1.53 (N=407)
丙群	1.25 (N=629)
分散分析による群間の差の検定	10%水準で有意 (F(2, 1560)=3.010)
多重比較による群間の差の検定	乙群と丙群との差が5%水準で有意

ここまでの検討からは、進路先として「現在住んでいる地域から離れたところ」を想定する者のほうが、「共生」という社会的課題を必要とする状況や地域社会の問題となり得る社会的な差異について、より強い気づきを有しているという理解を導くことができる。

### （3）沖縄の文化の捉え方

Q19 で尋ねた「あなたは、沖縄の文化と日本の文化との「違い」について、どのように考えていますか。あなたの考えに最も近いものを次のうちから1つ選んで○を付けてください」への回答結果についても、「地元志向」の3群の比較によって検討すると、表17のクロス集計結果が得られる。

表 17 沖縄の文化と日本の文化との「違い」について（甲～丙群ごと）

地元志向（進路先）		沖縄にはもともと特有の文化があり、現在も日本の文化との違いがある	沖縄にはもともと特有の文化があったが、次第に日本の文化との違いはなくなっている	沖縄と日本の文化にはもともと違いはなく、現在も違いはない	合計
甲群	度数	275	237	8	520
	%	52.9%	45.6%	1.5%	
	期待度数	270.0	234.2	15.9	520.0
	残差	5.0	2.8	-7.9	
乙群	度数	202	183	16	401
	%	50.4%	45.6%	4.0%	
	期待度数	208.2	180.6	12.2	401.0
	残差	-6.2	2.4	3.8	
丙群	度数	323	274	23	620
	%	52.1%	44.2%	3.7%	
	期待度数	321.9	279.2	18.9	620.0
	残差	1.1	-5.2	4.1	
合計	度数	800	694	47	1541
	%	51.9%	45.0%	3.0%	
	期待度数	800.0	694.0	47.0	1541.0

$\chi^2=6.387, p=.172$

この分析結果には統計学的な有意性はないため確定的なことは言えないが、残差の状態からは興味深い点を見出すことができる。それは、「地元志向」が相対的に強い甲群において、沖縄の文化の独自性を認める回答がより強くなされるということである。反対に、「地元志向」が相対的に弱い乙群においては、沖縄と日本との文化的差異を認めない回答がより強くなされる。

「共生」を志向する社会意識は社会的な差異の気づきと有意関連するという、前節での分析結果をふまえれば、ここでの検討においては乙群こそが沖縄の文化的独自性の認知と親和的であると想定するのが自然である。しかし甲群のほうにむしろその傾向があることから、「地元志向」が強い立場であるからこそ気づかれる文化的独自性があるという理解が導かれる。そのような意味での社会的な差異への気づきを経た「共生志向」が高校生のあいだにあり、それがこのクロス集計分析における統計学的な確からしさを弱めていることも考えられる。

ここで、「地元志向」の3群と「共生社会」という言葉の認知の3群とを重ね合わせた回答者の分布を検討すると、表18のクロス集計結果が得られる。

表18 「共生社会」という言葉の認知（甲～丙群ごと）

地元志向（進路先）		【A群】言葉を聞いたこともあり、その意味も知っている	【B群】言葉を聞いたことはあるが、意味はよくわからない	【C群】聞いたことがない	合計
甲群	度数	171	275	75	521
	%	32.8%	52.8%	14.4%	
	期待度数	164.5	275.7	80.9	521.0
	残差	6.5	-7.7	-5.9	
乙群	度数	131	207	65	403
	%	32.5%	51.4%	16.1%	
	期待度数	127.2	213.2	62.6	403.0
	残差	3.8	-6.2	2.4	
丙群	度数	186	336	100	622
	%	29.9%	54.0%	16.1%	
	期待度数	196.3	329.1	96.6	622.0
	残差	-10.3	6.9	3.4	
合計	度数	488	818	240	1546
	%	31.6%	52.9%	15.5%	
	期待度数	488.0	818.0	240.0	1546.0

$$\chi^2=1.891, p=.756$$

この分析結果もまた統計学的な有意性を主張できるものではないが、残差の状態からは、「地元志向」における甲群と「共生社会」という言葉の認知でのA群とが重なるものであ



ることが理解可能である。「共生社会」を知り理解する時の内容に、「地元」という視点から捉えられるものが含まれていることを、ここから示唆的に引き出しておくことは重要である。

本章での検討作業からは、現代高校生における共生社会意識が成人のそれに勝るとも劣らない内容の幅広さをもっていること、また、そのようなものとして「共生社会」という言葉を理解している者の割合が、成人世代におけるそれよりも大きく存在していることが示された。高校における日常的な学習内容との親和性をそこに指摘することもできよう。さらに、進路先や将来的な暮らしの場として「現在住んでいる地域から離れたところ」を想定する者において、こうした共生社会意識がより強く持たれていることも確認できたことになる。

ただし本章での検討作業からは、「地元志向」の弱い者よりも強い者のほうにより感得され得る社会的差異の存在可能性が残されており、その点がこの先の分析における要検討事項だと言える。換言すれば、高校生における「共生」の志向性には社会を学び知ることによって育まれる性格（全体社会起点）と、地元を重視する観点からこそ理解される性格（地元起点）との、2つの側面が示唆されていることになる。この点に関する探索は、本報告書の各章での分析において焦点化されることとなる。

#### 【注記】

- 1) 本研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て実施されている（課題番号：筑 25-83、課題名：高校生のコミュニティとの関わり合いに関する調査）。
- 2) 以下、本報告書の表中で  $N$  は回答者数を示すものとする。

#### 【文献】

- 共生社会形成促進のための政策研究会，2005，『「共に生きる学び合い」の提唱（詳細版）』内閣府政策統括官（共生社会政策担当）。
- 岡本智周・坂口真康編，2014，『共生社会に関する調査——2014年調査報告』筑波大学人間系研究戦略委員会。
- リスク共有型共生社会研究所，2012，「特集 後期近代社会における共生問題の構造」『社会学年誌』53：1-69。

## 執筆者

- \* 岡本智周 筑波大学人間系（大学院人間総合科学研究科）教員
- 飯田浩之 筑波大学人間系（大学院人間総合科学研究科）教員
- 新井 雅 健康科学大学健康科学部教員  
(筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程  
ヒューマン・ケア科学専攻 2014年修了)
- 津多成輔 筑波大学大学院教育研究科修士課程  
スクールリーダーシップ開発専攻
- 小山田建太 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程教育学専攻
- 江角周子 筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程  
ヒューマン・ケア科学専攻
- 大林沙希 筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程  
ヒューマン・ケア科学専攻
- 龍 伸剛 筑波大学大学院教育研究科修士課程  
スクールリーダーシップ開発専攻
- \* 坂口真康 筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程  
ヒューマン・ケア科学専攻  
日本学術振興会特別研究員（DC）
- 原市紘奈 筑波大学人間学群障害科学類
- 長創一朗 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程教育学専攻
- 川口理帆 筑波大学人間学群教育学類
- 桜井淳平 筑波大学大学院人間総合科学研究科3年制博士課程  
ヒューマン・ケア科学専攻

\*は編者

# 高校生のコミュニティとの関わり合いに関する調査

- 2013-14年調査報告 -

---

---

2015年2月10日 発行

編集 岡本智周・坂口真康

発行 筑波大学共生教育社会学研究室  
〒305-8577 茨城県つくば市天王台 1-1-1  
筑波大学総合研究棟D棟 316 室

印刷 株式会社いなもと印刷  
〒300-0007 茨城県土浦市板谷 6-28-8

---

---

\*本報告書は、科学研究費補助金・基盤研究（C）による「「共生」を実現する教育の実証的検討——「社会的カテゴリーの問い直し」に着目して」（課題番号：26381119、研究代表：飯田浩之・筑波大学准教授）の成果の一つである。